

アカデミック・セントラル通信

No. 6 令和八年三月

第5期におけるアカデミック・セントラルの在り方について

東海国立大学機構・機構長補佐／岐阜大学副学長 益子 典文

東海国立大学機構以下（「機構」という。）が発足し、機構直轄組織の一つとしてアカデミック・セントラル（AC）が設置されてから、早くも六年目となりました。この間、COVID-19 による感染症の拡大、世界各地で繰り返される紛争などの様々な地球規模の課題があり



ました。第四期中期計画期間中におけるACの活動を第一期活動と呼ぶことにします。第一期の活動では、岐阜大学及び名古屋大学の教育資源・成果を共有・連携することで、国際的に通用する質の高い全学的な教育プログラムを提供等を目的として活動してきました。これらの成果として以下のものをあげることができ

ます。第一は、学習支援システムの共同開発です。両大学でサーバー計算機システムや機構IDを共通化し、ラーニングマネジメントシステム(LMS)としてFACTを導入しました。そして、学習ステータス・システムを開発・導入しました。

第二は、連携開設科目の共通教育科目を中心に、両大学の科目を別の大学の学生が受講しています。その後、教職科目の一部などに拡張されましたが、今後、さらに開講科目数を増やすことを考えています。第三は、数理・データ教育及び英語教育等における教材の共有です。第四は、博士後期課程の学生への経済的支援として、東海国立大学機構メイク・ニュー・スタンダード次世代研究事業(MNRS事業)を運用していることです。

より効果的である、あるいはAC以外での連携の共通教育科目を考えると、両大学の科目を別の大学の学生が受講しています。その後、教職科目の一部などに拡張されましたが、今後、さらに開講科目数を増やすことを考えています。第三は、数理・データ教育及び英語教育等における教材の共有です。第四は、博士後期課程の学生への経済的支援として、東海国立大学機構メイク・ニュー・スタンダード次世代研究事業(MNRS事業)を運用していることです。

最後に、教育グッドプラクティス機構長特別表彰制度を創設し、両大学の教員にとって参考となる講義の実施者を表彰しました。

一方、様々な活動を展開していく中で、各大学で個別にすすめた方が

和四年四月にビデオオンデマンド型で新規開講し、一年生全員約千三百名を対象としています。学生が適切な日本語で文章表現力を高めるため、記述式課題を取り入れ、本学工学部横田教授が開発した「受講者同士の相互評価、採点者評価を導入したレポート採点法」を活用しています。これにより、他者の文章を評価する過程で得た気づきを、今後の自らの文章表現に活かすという主体的な学びを実現しています。今回の受賞にあたり、松尾機構長、吉田学長をはじめ、関係者の皆様から温かいお言葉をいただき、心より感謝申し上げます。受賞後は、FDやシンポジウムでの講演依頼、新聞コラム執筆の機会をいただき、この授業の内容や受講者同士の相互評価法を広めることができ

ました。第四期中期計画期間中におけるACの活動を第一期活動と呼ぶことにします。第一期の活動では、岐阜大学及び名古屋大学の教育資源・成果を共有・連携することで、国際的に通用する質の高い全学的な教育プログラムを提供等を目的として活動してきました。これらの成果として以下のものをあげることができ

ます。第一は、学習支援システムの共同開発です。両大学でサーバー計算機システムや機構IDを共通化し、ラーニングマネジメントシステム(LMS)としてFACTを導入しました。そして、学習ステータス・システムを開発・導入しました。

名古屋大学／頼 偉寧
名古屋大学ライティン グセンターが主催する Mei-Writing サマーキャンプは、学術的な好奇心を刺激し、自信を育み、人間に固有の「情動知性」を伸ばすことを目的とした、四日間の変革的な学習体験です。長野の落ち着いたキャンプ場で開催され、異なる背景をもつ学生たちが共に生活し、学び、笑い合いながら、協働と相互支援を促す綿密に設計されたチームビルディング活動に取り組みます。新聞コラム執筆の機会をいただき、この授業の内容や受講者同士の相互評価法を広めることができ

大学、専門分野、学年の異

なる学生で意図的に構成されます。数ある協働活動の中でも、特に特徴的なのが「共通のテーマに基づくコメディ脚本の制作」です。ユーモアを取り入れることで、違いを乗り越え、壁を取り払い、自信を育むことができます。成功したチームビルディングは強力な「ポジティブな学習環境」を生み出し、学生たちは仲間から支えられ、励まされ、知的な挑戦を進んで受け入れるようになります。このような環境のもとで、学習やコミュニケーションに対する自信は飛躍的に向上します。多くの参加者が「新しい視点を得られるだけでなく、ひとり学びでは得にくい“学ぶことの楽しさ”を再発見できた」と語っています。

てきました。もともとは大学院生向けのプログラムとして始まり、平成二十七年には大学院共通科目、平成二十八年には学部生にも対象が拡大されました。今後は国際化にも踏み出します。令和八年三月にはシンガポールでの「スプリングキャンプ（試行版）」を実施し、シンガポール国立大学（NUS）の学生を迎える予定です。

東海国立大学機構 LMS TACT

名古屋大学／中村 泰之
岐阜大学と名古屋大学の学習管理システム（LMS）が統合される形で、令和五年四月に機構

LMSとしてTACT(Tokai Academic Combination Tools)の運用が開始され、三年が経過しようとして



います。この一年も、継続的なヘルプデスクの対応により、運用上の課題をいち早く発見し対応してきました。その中で出てきた課題を踏まえ、安定的な運用を目指し、講義サイトの継続期間やデータ保存期間のルールを定めました。TACTの運用に関する一次情報としての各種案内は、「機構 LMS 『TACT』ヘルプセンター」で公開していますので、ぜひご利用ください。

学生ステータス・システム

岐阜大学／長谷川 暁人

学生の学修成果を可視化し、主体的な学修を進めるために、東海国立大学機構では学生ステータス・システムの導入を進めました。岐阜大学では、令和五年十月より

「Crescendo」と名付けたシステムが稼働しています。名古屋大学においても、

令和六年度より、学務情報システムの拡張として学生ステータス・システムが運用されています。現在はそれぞれの特色を持った独立のシステムとして動いていますが、両大学の担当者同士で協力



名古屋大会会場でのランチ風景

しながら、今後の継続を見据えて、より効果的な運用方法を検討していきます。

新任教員研修

名古屋大学／加藤 真

紀・安田 淳一郎

令和七年四月三日、東海国立大学機構新任教員研修が名古屋大学と岐阜

大学との対面会場を結んで実施されました。今年度からは対面形式のみで行われ、参加者は百二十七名（名古屋大学九十四名、岐阜大学三十三名）でした。前半は機構による研修、後半は各大学による研修が行われ、アンケートでは九割以上が「おおむね満足」と回答しました。自由記述からは、「新任教員研修を開催していただき、歓迎されているということを実感できたのがよかったです。また、同じ新任教員の方と交流できるのは、心理的にも

編集委員会

編集長 寺崎 一郎 副編集長 益子 典文

編集委員

安部 有紀子、加藤 真紀、北 栄輔、清島 絵利子、古泉 隆、小松 雅宏、齋藤芳子、椎名 貴彦、高橋 周平、中村 泰之、白村 直也、長谷川 暁人、古畑 翼、福岡 大輔、益川 浩一、松本みゆき、神酒 太郎、安田 淳一郎、山里 敬也

